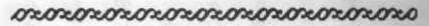


釜ヶ崎に"生活センター"を!



八三年、横浜・寿でおきた少年らによる青カン労働者に対する差別・抹殺攻撃を契機に発足した当会は、発足当初より「新今宮小・中学校」の跡地を、釜ヶ崎解放へむけた場として利用する方向での検討をおこない、その実現を課題として来ましたが、諸団体と話し合いを重ねる中で、釜ヶ崎の大人と子供が共に生きる場として位置付けることに合意し、共に手をたずさえて大阪市との交渉にあたることになりました。

跡地の「解放」運動をより力強いものとするために、本号外により、多くの方のご理解とご支援を求めたいと考えます。

子どもと大人の共生を求めて

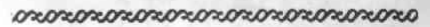
釜ヶ崎生活センターを創る会(仮称)

釜ヶ崎の子供のおそびの家「こどももの里」で働く中島共子さんは、最近こんな報告をしてくれました。

今年、今宮中学と新今宮中学を卒業した二人が、朝四時半に起き、西成労働福祉センターより日雇いの仕事に就き、「めっちゃ、しんどかった。」と誇らしげに帰って来た。「土方のおっさん、総理大臣より偉いで。あんなしんどい事やったりんやな。酒飲むのもわかるわ。」と二言目。「釜」の中では、昼間

円陣を組んで道端や公園に坐り込み、酒を飲んでる姿や、ごろ寝している姿しか見えないが、それは一面であって、同じ人が、バリバリ仕事をする偉い人なのだと驚いている。

この報告は、釜ヶ崎における大人と子供の関係の最も基本的なことについて発言しています。子供は、誰を見て育っていくのか。また、何を育て育っていくのかということですが、でもなく、釜ヶ崎の労働者を見て



育っていく、労働者によって育てられるということです。労働者は、時には酒を飲んで道端に倒れていることもあります。しかし、それは労働者のほんの一面にすぎません。労働現場にいる労働者に接することの大切さを、この報告は教えてくれます。少年達の驚きは、学校の教育では、見出し得なかったものに出会った驚きです。この驚き、そして尊敬は、今の学校教育では決して与えることの出来ない世界のものであるうと思えます。

もし、釜ヶ崎に他の社会にはない



▲こどもの里運動会・三角公園で

もの、しかも新しい人間関係をつくる力があるとすれば、この少年達と労働者の出会い以外の何ものでもありません。

この出会いを私達は、今日、何処で保障することが出来るのでしょうか。残念ながら、そのような場はありません。

私達は、少年達が、こんなに自由に語ることの出来る場を今こそ保障しなければなりません。しかし、「こどもの里」もそれには不十分です。そこには、労働者が集まって語るだけの空間が、いまのところ充分ではありません。子供達の声を、間接的に労働者が聞くのではなく、直接聞く―交流の場が必要なのです。もし、この少年達が、この言葉―「土方のおっさん、総理大臣より偉いで。あんなしんどい事やとるんやな。酒飲むのもわかるわ。」を、直接、釜ヶ崎の労働者につついたら、どうなるでしょうか。少年達から、額に汗して働く者へのこの尊敬の言葉を聞くと、きき、きき、労働者は励まされ、また自分を問い直し、そして自己の

労働に対する誇りを感じるにちがいません。

いま、押し進めようとしている運動の背後には、さらに、釜ヶ崎で生活していく上で起ってくる様々な問題が、語られ、解決される場を造り出そうという願いがあります。

例えば、サラ金返済に困り母親が蒸発、残された父と子は公園で六ヶ月も野宿を強いられました。また、子供を入籍せず学校へも行かせない夫より逃げ出した母と子は、四十日間も駅や公園で野宿しています。これらは、親と子はどんな困難な時も一緒にいたいという願いの為、民生の援助から外され、野宿を強いられたのです。この親子には、自立できるまで緊急に宿泊でき、その生活権と子供の学習権が保障される場が必要なのです。

また、幼児期より背負わされた様々な家庭問題の重さに耐えられず、さ迷い歩いている若者達にとって、自分を見つめ、新しい自分を発見していく場もまた緊急の課題です。

あるいは、生活一般の相談、スポ

ーツ設備また図書館なども学習の場として必要です。

これらの諸活動を通して、バラバラにされた私達の釜ヶ崎をもう一度、共同体として甦えさせたいという願いもあります。

私達は、これらの願いを実現する

労働福祉センターでの署名活動に参加して

釜ヶ崎キリスト教協友会 小柳 伸顕

生活センターを創る会が、釜ヶ崎の労働者から署名を集めようと話し合ったのは2月の初めであった。足もとの労働者こそ強力な支援である。

2月27日、28日の両日、早朝、労働福祉センターで、「生活センター

構想とその署名協力」を訴えるピラ

一万枚を配いた。「気持ち良いくらい労働者はピラを受け取ってくれた」と支援に来てくれた人は話していた。

3月1日2日、そして4月19日の

3回署名を集めた。朝のセンターは、

第一歩として、新今宮小中学校の跡地利用についての署名運動をおこないました。

私達の要望をご理解の上、その実現にむけて、是非、ご協力くださいますようお願いいたします。

労働組合の賃上げ春闘（七五〇円から八〇〇円）と重ってごったがえしていた。

労働者は、センターでは新顔の生活センターの署名にも気軽にこたえてくれた。

「生活センターの署名お願いしますーす」

「センターの署名、お願いします」

「おっちゃん、これ署名してください」

「さー」

「何やこれ。生活センター」

「新今宮小中学校の跡地に子ども

と大人と一緒に使える生活センターをつくれと大阪市にお願いする署です」

「新今宮小中学校の跡地で何処や」「この向う側に学校建っているでしょう」

「学校ならこっちはないか」と萩ノ茶屋小学校の方を指さす。

「いや。ここからちらっと見えるでしょう。あの建物ですよ」

「何や、跡地に何か建てるんじゃないやなくて、あの学校を使わせるといいう話か」

「ええ、そうです」

「学校だったら、子どもが勉強して使っているだろう」

「それが、今年の3月で、子どもがみんな卒業して誰もいなくなり、廃校になって、いま誰も使っていないません」

「学校だったら大人は使わしてもらえんやろう。署名したって無駄やろ」

「いや。大人も子どもと一緒に使わしてほしいという署名しているんです。詳しいことは、このピラ

にも書いてあります」

「ほんまやろーな。ほんまに大人も使わしてくれるんやろーな」

「だから署名をお願いしているんです」

おっちゃんは、字も下手やし、書くのも嫌いやと言いながら、ボールペンでサラサラと名前、住所、手帖番号を記入する。

「この番号、白手帖の番号か。どないするんや」

「釜ヶ崎の労働者も署名して、この運動に賛成しているという証拠です」

「おっちゃん、字うまいなアー」

「また、うまいこと言う」
労働者も満更でもなさそうな顔をしていた。字が上手だと言ったのは決してお世辞ではなかった。年配の人だけに毛字を書きなれた字であった。

労働者と話しながらの署名運動はなかなか楽しかった。住所はドヤかそれとも住民登録のある田舎かと聞く人。白手帖番号を空んでいる人。おもむろにポケットから出して手帖

番号を書き写す人。印鑑までいねいに押してくれる人。なかには酒の勢いで、いちゃんをつける人もいたが、ほとんどの人がきわめて協力的だった。でもこんな場面もあった。

「お願いしまーす。お願いしまーす」

「わしには子どもがいない。関係ない」

「でも釜ヶ崎にいる子どものこと考えて、是非、署名してください」

すると労働者の態度が変わった。かつて田舎に残して来た子どもの話をしながら署名してくれた。「関係ない」。それは、あえてその残してきた子どものことを考えまいとする労働者の叫びだったのである。

3回の署名運動ははじめての試みとしては大成功と言えよう。釜ヶ崎の労働者の署名三千人分を集めることが出来た。その他にキリスト教のグループが北は北海道から南は沖縄までと全国から集めたのが七千人。労働組合関係が五千人。部落解放運動の中で一千人分。計一万六千人分の署名が手許にある。



▲新今宮小・中学校全景

いま、ダンボール箱につめ込んだ一万六千人分の署名を前に、署名に協力してくれた人々の顔を思い出しきながら、是非とも「生活センター」を実現したいと決意をあらたにしている。センターでの署名が終った日、参加者の一人がいったことは、わたしたちみんなの思いでもある。

「これで、ますますほんまに作らなければならないという実感が湧いて来た」

釜ヶ崎の子どものくらしと教育を守ろう

——新今宮小・中学校跡地利用を——

市教組南大阪支部

釜ヶ崎問題小委

市川 正昭

市教組南大阪支部は、約二年間の内部的な検討、地域諸団体との対話ののち、本年一月から、新今宮小・

中学校跡地利用についての広汎な署名運動にふみきった。いま署名の集約から大阪市当局への手交と交渉を準備する段階に至っている。運動が新しい段階をむかえるにあたって、これまでの経過の中から一定の問題意識の整理をしておきたい。

一、新今宮小・中学校の開校

一九六一年夏の「釜ヶ崎暴動」の後、ドヤに住む約二百人の子どもたちが、戸籍や住民登録がないために、校区の学校への転入学が認められず、不就学のまま放置され、教育権が奪われていることが判明した。こうし

た子どもたちの教育施設として、一九六二年二月にあいりん学園が発足、同年八月に、独立校あいりん小・中学校となった。しかし独立校というもの、あいりん会館四、五階の間借り学校であり、運動場もないありさまであった。そこで「土と緑」のある独立校舎を建設してほしいという要求が学校関係者から強く提起された。

この問題に先駆的にとりくんでいた全港湾労組建設支部西成分会と大阪市教組の共闘が成立して運動が大きく前進し、地域住民団体などの支援もえて、一九七三年十一月に新今宮小・中学校が完成した。(二億六千万円)

この経過が示すものは、結局、地元からの運動が、行政当局を動かし、

重い腰を上げさせたということであり、高度経済成長期で、自治体財政にある程度の余裕のあった時代です

ら、行政側がすすんで子どもたちの教育保障にとりくむ姿勢を示すことはなかったということである。またあいりん学園発足から十年以上の年月がかかったことをふりかえてみると、教組運動としても、この間いったい何を考えていたのかと自省の念にかられるところである。教組として、子どもと教育の問題に主体的に責任をもってかわらねばならぬという自覚をもつに至るには、一九

六八年越境入学根絶のたたかい以降の部落解放教育運動の高揚期をまたねばならなかった。教組運動のみならず、労働組合運動は、ともすれば組合員の「エゴ」を守る方向に傾斜

し、社会的にみると「保守」的立場におちこむことがありうるという自戒の念を明確にしておかねばならぬだろう。労働運動は革新的というのは短絡的であり必ずしも真実でなく、労働運動の革新性は、組合指導部・活動家の不断の自己革新を抜きにしては語れないし、実現されないことを肝に銘じている。

二、新今宮小・中学校の廃校

新今宮小・中学校は開校後間もなく、児童生徒数の減少期を迎える。その背景には、釜ヶ崎の子どもの絶対数の減少・釜ヶ崎地区の周辺広域化がある。また、戸籍や住民登録のない子どもたちにも近隣学校への積極的な就学措置が行政的にとられるようになったことも大きな変化である。これには「新今宮小・中の教育は、結局は「隔離」教育ではないのか」という反省が、ひとりひとりの子どもを大切にす解放教育運動の発展の中から教育関係者全体の中で広まったことも影響している。不就

学状況にある子どもが発見された場合でも条件さえ整えば、新今宮小・中ではなく普通の校区の小・中学校で教育するのが正しい。そのゆきつが先が、新今宮小・中の廢校につながったとしても、それはやむをえないし、むしろ是とすべきだ。こういう考え方で学校関係者が大きく意志統一されるには、ある年月が必要であった。しかし、ここでも、教組としては、子どもの教育にとってどうかという立場をある程度とりえたと考える。

こうして、新今宮小・中は一九八四年三月末をもって廢校となった。

三、横浜市寿町事件の衝撃

一九八三年二月、横浜の中学生たちが日雇労働者を虐殺する事件が起った。これを知った心ある教育労働者たちは、大阪でも、自分の教え子たちが、釜ヶ崎の労働者に対して加害することが起りうると直感した。低成長時代に入り、加えて臨調・行革の波は、いわゆる「低辺」労働者の生活を困難にし、家庭崩壊が進行

し、ゆき場を失った子どもたちが生れており、「非行」「校内暴力」「いじめ」「怠学」が拡がっている。そうした中で「荒れ」「落ちこぼれ」といわれる「病める子ども」たちが、より弱者である無抵抗の労働者を襲うことが起りうるという直感であった。

このあたりから、市教組南大阪支部としての釜ヶ崎を教育課題としてすえなおすとりくみが徐々に始まった。そしてその当然の結果が、新今宮小・中学校跡地を、子どもたちのくらしと教育を守るために役立つ

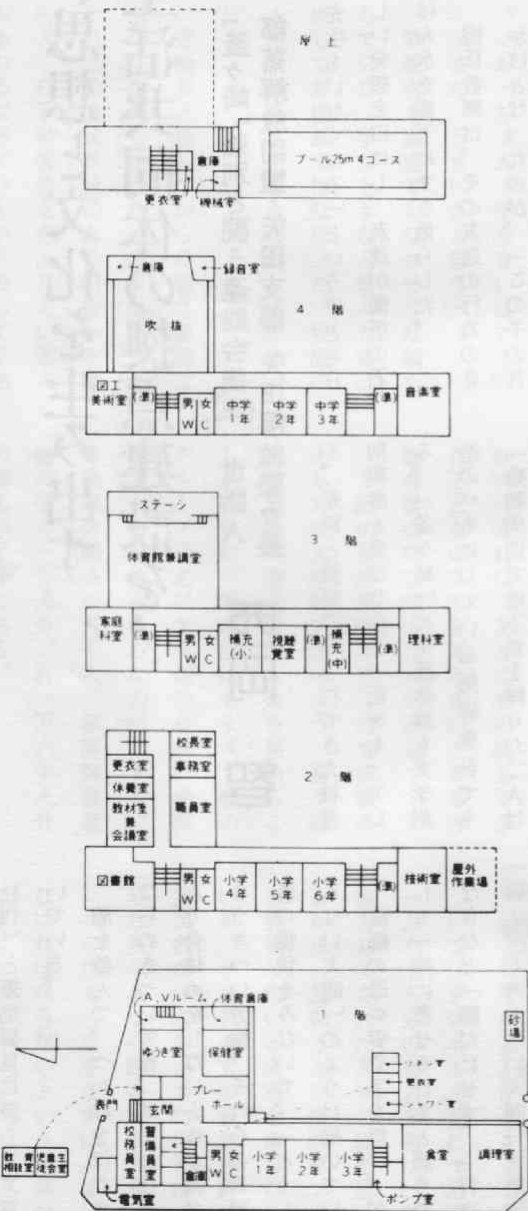
施設にしていこうということであった。そしてその活動は、単に教職員、

学校関係者のみで達成されるものではなく、地域の労働者・住民との協同によって可能となるであろうという考え方が生れている。同時にこのことは、釜ヶ崎の子どもの居住の流動性をも考慮に入れた場合、西成における解放教育運動の課題そのものであるという考え方が広がってきている。したがっていま、市教組南大阪支部は重い責任と課題を背おって、一歩づつ着実に歩いていかねばならない立場にあるといえる。

四、むすびにかえて

要求実現を展望する場合「教育委員会は子どもの教育・子どものくらしと保育は民生局で」という行政側の二元論的なあり方をどうのりこえるかが最大の問題のようである。しかも、今日は、自治体財政きりつめの時代という悪条件下にある。

結局キメテは広汎な人々の意志統一・団結と、英知の結集であろう。そして釜ヶ崎暴動以来つきまといている「過激派の巣」という予断と偏見を克服する整然たる行動であろう。



▲新今宮小・中学校配置図

「釜ヶ崎」に新しい思想と文化を生み出す

生活共同体の拠点建設を！

「釜ヶ崎」差別と闘う連絡会議(準) 世話人
部 落 解 放 同 盟 矢 田 支 部 矢 田 解 放 塾 々 長 西 岡 智

① 二つの死の意味するもの

「釜ヶ崎」差別と闘う連絡会議(準備会)は一九八三年二月の横浜で中学生らによる日雇失業労働者三人を虐殺するという衝撃的な事件をきっかけに結成された。人間を「モノ」として見て、「汚い」「町をきれいにしただけだ」という人権感覚の麻痺は、中学生ら自らの「生命の尊厳性」を殺されているといえる。

その同じ横浜で今年二月十六日、小学校五年生が高層団地十四階(三六・五米)から飛びおり自殺をした。「紙がくばられた／みんなシーンとまった／テスト戦争の始まりだ／(中略)テスト戦争は人生を変える苦しい戦争」と詩にかく感性豊かな子であった。「学校を破産させたら、

先生もいなくなる」という子どもらしい発想を口にし、友達が便所の石けん水を廊下にまき散らした。担任教師は、その友達の行為のき

っかけとなったのが、「この子の言葉である」ときびしく反省を求めた。幼い魂が何を求め、何を叫んでいるのか、それはなぜかということを考え

えず、「生意気だった」「私の手におえなかつた」という教師の独断が、一つの生命を抹殺したのだ。パンを

求めている子に、石を与えているのだ。私たち大人は、自らの精神の荒

廢が、子どもの精神を荒廢させているという自覚をせまられている事件

である。

て、差別と偏見でみられてきた被差別部落と重なり合う一面をもっている。「釜ヶ崎」の生活体験を文学創造のバネにしている黒岩重吾でも

「動物園前で地下鉄を降りた二人は飛田商店街に出た。まだ昼になったばかりなのに娼婦が立ち、地下足袋の労働者が赤い顔でうろついている。ごぞを敷いた浮浪者が身体をえびのように曲げて寝ていた。：中略：一杯飲屋は昼なにかの客が入り、騒々しい。仕事にあふれたり、さばった連中が集まっているのだ。彼等は仕事がないとただ酒を飲み、金が余ると女を買う：中略：将来どうするつもりだろう。と考えてしまう。

自分の将来について何も考えない人間の気持が正明には理解できない」(さらば星座六巻の下、六四頁集英

社刊)と差別偏見に満ちた文章を書いている。

酒を飲んで、つかれをほぐさねばならぬきつい労働、時には仕事を休んで骨休めをしないと体がぼててしまふきつい労働。それらの日雇労働者の現状をみないで、「どうしようもない人間」のように描いている。

故郷の母や妻や子を想い、何とかして一緒に暮せる日をと願うやるせなさなど一顧だにせず、「将来について何も考えない人間」と断定している。

「釜ヶ崎」は人間荒廢の絶望の街なのか。否である。最も虐げられた者こそが、人間の尊さを一番よく知っているのである。水平社宣言でも

「ケモノの皮をはぐ報酬として、生々しい人間の皮をはぎとられ、ケモノの心臓を裂く代価として暖い人間の心臓を引きさかれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた呪われの夜の悪夢のうちにも、なお誇りうる人間の血はかれずにあった。」

「人の世の冷さがどんなに冷いか。人間をいたわる事が何であるかをよ

う

う

う

う

② 「釜ヶ崎」差別を逆転させる発想を！

「釜ヶ崎」は「浮浪者」の街とし

く知っている吾々は、心から人生の熱と光を願求礼讃するものである。」とのべている。釜ヶ崎の日雇労働者の心情も同じものがある筈だ。この人間性への叫びに、どう表現して力をつけるのか。差別と偏見にまけない主体をつくり、差別と偏見の根元をたち切っていく施策が問われている。

③ アル中の労働者を尊敬する子ども

「子どもの里」での話である。「今年今宮中学と新今宮中学を卒業した二人が、朝四時半に起き、西成労働



福祉センターより日雇いの仕事に就き、「めっちゃ しんどかった。」と誇らしげに帰って来た」という。そして「土方のおっさん、総理大臣より偉いで、あんなしんどい事やっとなんやな、酒飲むのもわかるわ」と語ったという。

アル中の親父や大人がなぜそうなるのか。資本の重圧の中で失業を余儀なくされ、闘うにすべなく、酒にまぎらわさざるを得ない悲しみ。一人ではどうすることもできず、さり

とて団結するには砂のような孤立した社会—この心の闘いに想をはせてくやしさを共有して、いきどおりに転化させていける子どもが育っているというのである。釜ヶ崎に育っているこの子どもと大人の共生・連帯の中に「明日」が見える力をつけていく芽があるといえよう。

④ 「釜ヶ崎」差別解放の総合計画の第一歩

部落解放運動は、部落を「解放の町」「教育の町」にするため部落解放総合計画を樹立し、部落大衆と連

今年四月十九日の毎日新聞夕刊に「あいりん^金／宿泊所軒並みホテル化／新空港前景気で浮上／日給八千円」という、まことに景気の良い見出しの記事があった。

釜ヶ崎の昭和五九年度の「就労人数は延べ八十二万二千余人で史上最高に。^金労働者の懐を当てこんで簡易宿泊所が次々、冷

偽真の報道^金

暖房完備の「ホテル」に改築されている。」とも書いてある。ところで、琵琶湖は現在満水状態のようだが、だからといって、昨年の渇水騒ぎがなかったことにはなるまい。釜の仕事量についても同じことだ。年間平均して仕事があったわけではない。幾ら仕事が多いといっても一日で二日分は稼げない。

帯の力で、行政を動かし、教育、労働、住宅などの生活環境をかえ、街づくりをおしすすめ、一定の成果をおさめつつある。この教訓を生かして「釜ヶ崎」解放のための総合計画を樹立 実現の運動を、住民が中心となって起す必要がある。その第一歩として、新今宮小・中学校跡を、

釜ヶ崎の住民労働者、子どもたちの新しい共同体形成の拠点として活用していくべきである。住民に開放されたセンターとして事業予算もつけて運用されるべきである。

多くの芸能人を輩出した天王寺の

芸人村は釜ヶ崎にある。ここでつちかった生活の底辺からの笑いと哀感、庶民文化の根っこであった。新今宮小・中学校の跡地が、新しい人間観と教育観、豊かな感性をつくり出す共同体の拠点として生れ変わってこそ、この小・中学校をつくった先人の志を発展させるものと確信する。二十一世紀にむけ、発想の転換はかつてすべての叡智を結集し、釜ヶ崎差別をなくしていく施策を打ち出し、実現させていこうではありませんか。

明日へつなぐ子供たちの

体づくりを通して未来へ

佐川みどり

今、「子どもの里」で、週に一〜二度、子供たちと空手の練習をしています。

練習の前後、女の子たちは上の部屋で着換えるのだけれど、よくその場は、お菓子の交換や分配やらでにぎわっています。時間は夜七時前後。夕食を終えるような時分です。(我家でも仕事から帰り忙いで簡単な食事を胃袋に詰め込んで出てくるのですが。)夕食をとってきている子はほんのわずか、二〜三人もいるでしょうか。練習前のわずかの時間に、近くのホルモン屋まで走る子もいます。

それぞれの子供たちをみると、その年相応の体格をしていると思われる子は、少ないようです。小さいかやせているかのようです。練習後、「ご飯あるかなー。お

ずちよっとしかなかったからな！」
「ご飯にかつを節かけて食べるのおいしいなー。お茶漬けも！」

育ちざかりの子供たちのなんと貧しい食事内容でしょう。食事代としてお金をもらっても、スナック菓子やジュースに消えてしまつて、栄養をきちんととれていないようです。

親たちには、仕事の都合でそろって食事が出来なかつたり、用意をするのもしんどい状況にあつたりする人も多い中で、子供たちは、一番大事な時期の食事を充分にとることがむづかしくなっています。

X X X

概してやさしい嫌いの子供たちに、「これは体のためになるんやから、どこそこにあえから食べ！」とか言いもつて食事をすることから、知らず知らずのうちに、体に必要なもの

を覚えていく——というような事を、今の釜ヶ崎の家族の状況では、個々の家庭でそれをやるというのはむづかしく、全体として(街全体として)

その事を考えていかざるをえないように思います。母親や父親がいなくても、そばにいる人が、それを教えてやったり、注意してやったり。

親の肩がわりをするのではなく、やれる人がやるんだという、そんな

知つておいて欲しいこと

京都でも青カンを余儀なくされている人々が居ますが、京都駅においては、京都府警七条署、鉄道公安員らによって、追い立てられ、逮捕されるという事態がおこっています。

これに抗議し、刑事罰のオドシで追い立てるのではなく、福祉・労働面での行政施策を打ち立して問題解決をはかるべきだ、という要求を実現するために、「日雇労働者の人権と労働を考える会」が結成されました。(参加団体・部落解放同盟京都府連合会・東九条地域生活と人権を

ものを創り出していかなくてはいけないのでは？

今、「生活センター」を創ろうという声の上がついている中で、この釜ヶ崎のいっぱいある矛盾・問題の直接の解決にはならないことかもしれないけれど、明日へつなぐ子供たちに、体をつくっていくことを通して未来へつながっていきたいと思います。

守る会・日雇労働者の人権を守るキリスト者の会・釜日労・差別と闘う連絡会)

大阪・大正区では、飯場の新築をめぐって、次のような立て看やステッカーが貼りめぐらされています。

「我々の街をスラム化から守ろう。渥美工務店の独身労働者専用宿舎建築反対。三軒家東の環境を守る会」

反対運動をしている人達や弁護士は、労働者を差別するつもりはなく、労働者には全く関係のないことだ、と言っていますが、労働者に対する差別をテコにした反対運動であることは明らかでしょう。